

【個人研究】

# オヴィド・ドクロリーにおける「自己」 —傾向ないし魂、生命の思想史的連関から—

渡邊 優子\*

Ovide Decroly's Idea of "Self":  
Tendencies, Soul, and Life in the History of Thought

Yuko WATANABE

This study examined the concept of "self" according to Ovide Decroly in the history of thought. Decroly's "self" is linked to tendencies, soul, and life. The Belgian psychiatrist and educator Ovide Decroly was active from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century. Decroly's educational ideas were circulated through a curriculum known as the "Decroly Method" in the New Education Movement. His ideas were based on his treatment, education, and study of handicapped children at the time.

Previous studies have focused on the Decroly Method presented by him and his collaborators, but few studies have analyzed the concept of "self," which plays a key role in his ideas.

The current study identifies "self" as a dynamic whole, consisting of both biological and mental factors. Decroly's ideas and activities, and especially those related to handicapped children, were considered to be a type of social defense from the perspective of governance. However, his ideas also have philosophical and spiritual aspects. The "self" as not just a surface phenomenon but is also associated with *fond* (bottom). Decroly expressed this using words like *tendances* (tendencies) and *âme* (soul).

For Decroly, there is no paradox between exploring the soul and scientifically studying tendencies during his time. Within the context of the history of thought, Decroly's "self" falls within the lineage of ideas about life inspired by Henri Bergson.

**Keywords** : Ovide Decroly, self, tendencies, soul, life, Henri Bergson

オヴィド・ドクロリー、自己、傾向、魂、生命、アンリ・ベルクソン

## はじめに

本稿の目的は、ベルギー人の精神医学者で教育者のオヴィド・ドクロリー (Ovide Decroly, 1871-1932) における「自己」について思想史的観点から検討することである。

当代ドクロリーは、イレギュリエ (irrégulier)

という形容詞を使って「障害児」を総称し、その研究や教育に医学的心理学の視座から取り組んだ。イレギュリエの研究や教育をふまえ、ドクロリーによって考案されたドクロリー・メソッドは、レギュリエ (régulier) と形容される「健常児」の教育にも適用され、普及した。

殊に、ドクロリー・メソッドは、19世紀末から20世紀初頭にかけて国際的に展開した新教育運動

\* わたなべ ゆうこ 文教大学人間科学部臨床心理学科

を代表する草分け的な教育内容・方法として評価されてきた<sup>1</sup>。他方で、同メソッドにおける継承過程での形骸化の問題や、同メソッドの中核にある考えの恣意性については早くから指摘、批判されてきた<sup>2</sup>。同メソッドやドクロリーの思想については、教育内容・方法、心理学等の観点からたびたび検討されてきたが<sup>3</sup>、同メソッドやドクロリーの思想の特質が十分に明らかになっているとは言えない<sup>4</sup>。近年では、実証史的観点からドクロリーの思想形成について検討する研究<sup>5</sup>や、社会史的観点からドクロリーの思想および同メソッドの特質を検討する研究<sup>6</sup>も行なわれている。また思想史研究の観点から田中は、ドクロリーの思想および同メソッドをキリスト教の存在論ないしアガペーとの繋がりから捉えている<sup>7</sup>。

本稿では、より内在的な検討に着手するために、ドクロリーの依拠する立場や同メソッドの記述等を手がかりに「自己」の輪郭を捉えることを試みる。そのうえで、ドクロリーにおける「自己」の思想史的位置を素描することを目指す。

## 1. 「自己」の輪郭

### 1.1. 生物学的で哲学・心理学的な生

ドクロリーによれば、自らが拠って立つ「生物学的で心的な (biopsychique) 土台」は「私たちが心的なもの (psychisme) と呼んでいる人類に特有な何かと繋がっている生物学的なもの (biologique)」である<sup>8</sup>。「心的なもの」は、個々の人間のみならず「人類に特有な何か」を理解するうえで不可欠な要素であり、それは「生物学的なもの」との関連から捉えられる。すなわち、子どもとは何かという問いに取り組む以上は、その子どもに対してどのように働きかけるべきかを想像するために、その子どもが生まれてくる前にまで遡る必要があり、生物を支配する根底的法則を念頭に置かなければならない<sup>9</sup>。しかしドクロリーは、子どもを単に生物あるいは生物学的存在として考えることはできないとしたうえで、哲学や心理学の観点から子どもを心的存在 (être mental) として捉えることの重要性を急いで付け加えている<sup>10</sup>。

ドクロリーの述べる生物学的で心的な土台には、類としての人間存在に注目する生物学的視点と、心をもつ個体としての人間ないし子どもに注目する哲学・心理学的視点との二つがある。しかしながら、「それ [生物学的で心的な土台——筆者註] はダイナミックなものである。それはつまり私たちは活動する子ども (enfant en activité) について検討し、その一瞬一瞬を考慮する必要があるということだ。このことは、結果的に、子どもをよく理解し、働きかけることを可能にするのである」と述べられるように<sup>11</sup>、ドクロリーの関心は、これら二つの視点が繋がり交錯するところ、換言すれば、ダイナミックな土台それ自体としての「活動する子ども」に寄せられている。

### 1.2. 生が繋がりが交錯するところとしての「自己」——活動する子ども

生物学的で哲学・心理学的な生が繋がりが交錯するところのダイナミクスが、ドクロリーにおいては「活動する子ども」を通して検討されている。「活動する子ども」の検討から浮かび上がってくる「自己」の輪郭を、ドクロリー・メソッドの記述から確認しよう。

まず同メソッドでは、子どもによって検討される二領域として「子どもによる自分自身についての知識。自己意識と、そこから当然くるものとしての自分の欲求、願望、目的、最終的には自分の理想についての意識」と、「その子どもが生活し、依存し、そこで活動する自然的、人間的環境の条件についての知識。この知識をもつことによって個人的欲求、願望、目的、理想は接近可能なものとなり、次いで実現され、そのことがかえって広く人間全体の欲求、願望、目的、理想を理解し、かつ、それへの適応条件や、そこに協調して意識的、知性的に連帯していく手段を理解することにつながっていく」ことが挙げられている<sup>12</sup>。

一人の子どもにおける生ないし学びの全体性を重視する同メソッドにおいて、上述の二領域の知識は不可分のものである。「今・ここ」を生きる子どものミクロな生を基点として、「自分自身についての知識」と「自分を取り巻く環境についての知識」は連動して検討されていく。子どもは自

身の存在について——自分とはどのような存在であるのか、なぜ存在するのか——検討するのであるが、ここでは、欲求や願望、目的、理想という観点から「自己」の存在は規定されると考えられている。すなわち、ここで検討されると想定されているのは、欲する存在としての「自己」である<sup>13</sup>。子どもは、自らの欲するところを充たすために、自分を取り巻く自然や人間といった諸条件について学び、利用していくのである。そして、個々の子どもが自らの欲求を達成しようとするのは、人類の目指すところと違うことはなく、意識的で知性的な連帯の方法を見出すことに繋がることと述べられる。

個々の子どもの欲するところと人類の目指すところは変わらないというテーゼは、同メソッドだけでなくドクロリーの思想に一貫して確認できるものである。両者が変わらないからこそ、ドクロリーにおいては、子どもに生の根底的法則をよく理解させる必要があるのであり<sup>14</sup>、私たち大人は子どもをよく理解する必要があるとされている<sup>15</sup>。とはいえ、なぜ、どのようにして、子どもの個人的欲求と人類の目指すところが繋がっていくのか。

### 1.3. 知性的かつ生物学的な「自己」観念の構築

子どもの感情傾向を検討する中で、ドクロリーは次のように述べている。

感情の発達には他の様々な要因から独立していない。それは、子どもは本能的な存在以上のものであるということであり、知性的活動のおかげでそのように特徴付けられているのである。環境は、意味をもってその子どもに働きかけ得るのであり、様々な傾向を生じさせたり、変容させたり、妨げたりする現象を引き起こし得る。このことは、これらの要因のおかげで、美的傾向や精神的あるいは宗教的傾向のような派生的で複合的な傾向が現れ得るということであり、それらの特別な様相があるということだ<sup>11</sup>。

ドクロリーは、子どもが環境に意味を見出すようになるとき、子どもの活動は知性的になってい

るのであり、知性は発現する傾向に影響を与え得ると指摘する。とりわけ「美的」「精神的」「宗教的」と表現される「派生的で複合的な」高次の傾向の発現において知性の働きが占める役割は大きい。このような高次の傾向の潜在的可能性が発現に至るかどうかは知性が握っているのである。

なるほど、ドクロリーによれば、私たちは欲求を意識化するに際し、欲求を「自己」や「自己」ではないものに関係付けることを出発点として、熟慮や判断、推論を行ない、行為を遂行したり中断したりする<sup>17</sup>。本能的な傾向は、個や類の保存と密接に結びついている生理学的必要性との関係から理解されるが<sup>18</sup>、こうした本能的傾向や原初的欲求から派生する二次的傾向の中には、「身体的、より正確には、生理学的な個体にもっぱら向かっていくのではなく、法的用語に従えば、心的(mental)、精神的(moral)個人、心理学者たちが自己(moi)や個人(personnalité)と呼ぶようなものに関する傾向の形態を呈するものもある」<sup>19</sup>。

とはいえ、「自己」を起点とした意識的ないし知性的な傾向の発現までには時間を要することに鑑みれば、「自己」観念の構築は知性の働きにのみ依存しているのではない<sup>20</sup>。ドクロリーは次のように続ける。「しかしながら、ある意味では、この傾向[心的、精神的個人、心理学者たちが自己や個人と呼ぶようなものに関する傾向——筆者註]は空腹や防衛本能と同一視、結合できるものである。これは、英語で言うself-feelingであり、私たちが自己感覚(amour-propre)と言うところのものである」<sup>21</sup>。すなわち「自己」観念の構築は生物学的な意味で捉えられる。たとえば、3～4歳の子どもにおける自己感覚は、大まかには、支配的、頑固、矛盾、臆病という様相を呈して現れてくるのであるが、これらは、その子どもが自らを取り巻く環境をどう感じているか、端的に述べれば、好ましいと感じているかどうかということに尽きるのだと言う<sup>22</sup>。子どもは成長するにつれて、所有本能、競争心やライバル心、称賛に関する本能、共感、性的本能、母性的本能、父性的本能、集まることを好む傾向等を示すようになる<sup>23</sup>。その他にも、好奇心や遊び、模倣等の多様な傾向が発現するが、これらは基本的に自己防

衛ひいては個と種の保存という生物学的観点から解釈される<sup>24</sup>。

こうした「自己」観念の構築についての理路が明らかにするのは、ドクローリーにおける「自己」は、人間が知性の可能性にひらかれていることの象徴であると同時に、人間が生物学的意味を超え出ることができないという有限性の象徴でもあるということだ<sup>25</sup>。

## 2. 「自己」の思想史的位置

### 2.1. 社会防衛的思想とユマニズム的理想

人間存在を、知性をもった心的存在の可能性にひらくと同時に、生物学的存在であることからの逃れられなさを再確認させるドクローリーの「自己」は、思想史上にどのように位置付けることができるのか。

ドクローリーにおける生物学的で心的な土台が、進化とそれに関わる倫理についての検討を通して肉付けされていることに注目しよう。たとえば、子どもに学ばれるべき知識については次のように述べられる。

必要不可欠な知識を論理的に身につけることは、何よりもまず、宇宙と全存在を支配する偉大な法則であるところの個人的かつ社会的な生の大きなメカニズムと結びついている。つまり進化は進歩と同義であり、もちろん生のための闘いよりも生のための連帯に基づいている<sup>26</sup>。

子どもが自らを取り巻く環境に徐々に適応していくとき、子どもは、この宇宙と全存在を包摂する「生の大きなメカニズム」について学んでいるのである。「生の大きなメカニズム」を生物学的に換言すれば、それは「進化」のことを指している。そして、ここで述べられる「進化」とは「生のための連帯」に基づくものであり、倫理的なものに差し向けられていることを看取できる。

当代において生物学的なもの倫理的なもの重ね合わせられるとき、その語りが社会防衛的思想ひいては優生的思想とどのような関係にあるの

か留意する必要がある。とりわけ、統治の観点から検討するローズによれば、私たちは博愛的精神や慈善事業の背景にある道徳や倫理の内実に至るまで目を向けなければならない<sup>27</sup>。すなわち、当代において「規律訓練のレジーム」の内にとどまることのできる、いわゆる「正常」ないし「普通」の子どもとは、病理的だったり厄介だったり反抗的だったりする等して、「不適応」と判断された「異常」な子どもとの対比によってはじめて明確化されるものであった<sup>28</sup>。当代における個人差への注目は、労働や学校、軍隊などにおける能率的で合理的な配置を実現するために「規律訓練のレジーム」から逸脱する者の特定と対処を課題としていたのであり、そこで重視されるのは、どのように分類し、どのように組織化ないし道徳化・倫理化するかということであった<sup>29</sup>。このことから分かるように「正常」「異常」を分ける時点で、そこには「何が望ましいかについての判断だけでなく、達成されるべき目標についての指示も含」まれているのである<sup>30</sup>。

統治の観点からの指摘は、ドクローリーにも当て嵌まる。というのも、異常研究をベースとして子どもの教育に精力的に携わるということは、ドクローリーの場合、自身の専門である精神医学等の立場から「正常」「異常」の分類を行ない、社会へのよりよい適応の方法を検討することに他ならなかったからである<sup>31</sup>。たとえばゴルブは、当代進化論の影響もあり<sup>32</sup>、「異常」な子どもに見られる不適応は、個の保存に関する本能が規範的なあり方から逸脱していたり、それが欠如したりしていることとして解釈され、このことは類の保存を脅かすものとして見做されたことを指摘している<sup>33</sup>。「異常」な子どもが見せる不適応は、社会の脅威であり重荷と見做されていた<sup>34</sup>。

殊に、ドクローリーに特徴的なことは、不適応をアルコール中毒や結核、梅毒、下層階級の住環境および労働環境、不衛生等と同列の、近代化や都市化がもたらした社会問題の一つとして捉えていたことである<sup>35</sup>。当代のベルギーは、産業革命とコンゴの植民地経営によって、イギリスに次ぐ世界第二位の工業大国となっており、経済成長の只中にあったが、そうした中でも周期的な不況に

みまわれ、労働者階級、特に女性や子どもは過酷な生活を強いられていた<sup>36</sup>。こうした状況に臨み、ドクロリーは、当代のベルギー社会を機能不全に陥った病気の状態と診断し、教育による社会改造を構想した<sup>37</sup>。ヴァニオンは、ドクロリーの活動は多岐にわたるものであったが、とりわけベルギー国内における複数の教育に関する仕事は、一種のプロジェクトと見做すことができると言う<sup>38</sup>。なぜなら、ドクロリーの関わった複数の教育機関や孤児院では、単に方法や技術としてドクロリー・メソッドが共有されたのではなく、子どもや社会についての新たなビジョンを含んだ指導的原理が共有されており、それは既存の制度に対する異議申し立てであったからである<sup>39</sup>。ドクロリーにとって自身の仕事は、自らの学校だけでなく、ベルギーという国全体の教育改革を視野に入れたものであり<sup>40</sup>、教育に関するプロジェクトは、社会的で政治的で哲学的な性格をもつものであった<sup>41</sup>。こうしたドクロリーの仕事に通底するものとして、ヴァニオンは、当代ベルギーのカトリック政権に対する、フリーメイソンので世俗的な「ユマニズム的理想 (idéal humaniste)」といった観点を指摘している<sup>42</sup>。ヴァニオンによれば「ドクロリーは、政治的には革命的というよりは改良主義的であり、ブリュッセルの進歩主義的ブルジョワジーの象徴的存在である」<sup>43</sup>。

ドクロリーにおいて、病気のベルギー社会を治療し、正常化するための道具として教育が捉えられたことから分かる通り<sup>44</sup>、ドクロリーが「正常」とされる状態を目指すべきものとして想定していること、またそこには倫理的なものが重ねられていることを確認できる。そうであるならば、ドクロリーにおける「自己」も詰まるところ、目指すべき倫理に向けて駆動することを運命づけられていると言える。ドクロリーは認識活動の検討において以下のように述べている。

はっきりしている基本的な事実は、心的作業は、そのどの段階においても、[中略] 結局、主体の恒常的ないし一時的に優勢な傾向 (tendances) によって、一言でいえば、一定もしくは変わりやすい魂 (âme) の状態によっ

て、支配され、決定され、いずれにしろ影響をうけるか、あるいは影響を受けやすいものである<sup>45</sup>。

斎藤が指摘するように、ドクロリーが認識活動を規定するものとして「主体の恒常的ないし一時的に優勢な傾向」ないし「一定もしくは変わりやすい魂の状態」を挙げていることには注目すべきであるだろう<sup>46</sup>。というのは、認識活動の検討を通してではあるが、ドクロリー自身によって、人間存在を規定するものとしての所与が示されているように見受けられるからである。しかし、上述の不安定さが強調されている表現に、所与の目指すべき倫理を——もしそこに確固とした不動のものをイメージするのであれば尚更——重ね合わせて理解することはできるのだろうか。

## 2.2. 傾向ないし魂の探究

人間存在を規定しつつも不安定さを抱えもつもの、すなわちドクロリーが「傾向」あるいは「魂」と呼ぶものについて検討を進めるために、ここでは心理学史の中でも、とりわけ「アンダーグラウンド心理学」<sup>47</sup>の系譜に注目する。リードによれば、19世紀初期において心理学は魂 (soul) の科学であったにもかかわらず、19世紀終わりには魂を放棄し、魂を心 (mind) によって置き換えた<sup>48</sup>。つまり現代の私たちがもっている心理学の歴史とは、この置き換えの後の〈心〉の歴史に限定されているのである。魂から〈心〉への置き換えに際して重要な役割を果たしたのが「リベラルなプロテスタント神学」における人間本性についての考え、すなわち「真の悪と非合理性は自己の中核にとって外的なものに見なす立場であり、「意識的な心 (真の自己) と無意識的な心 (魂の「外部」にある力から影響を受ける部分、そしてこの「外部」には身体が含まれる)」という新たな二元論」の立場であった<sup>49</sup>。リードによれば、19世紀ヨーロッパ諸国で大学などの限られた機関において諸学問が制度化されていく中では、諸学問は国家や教会を支持するものでなければならなかった<sup>50</sup>。当代、上述した〈心〉の枠を超えて魂や生命について検討することは権威者には歓迎されないこと

であり、抑圧の対象とされることを意味したとされている<sup>51</sup>。

19世紀を通して〈心〉についての考えは広く普及し、「意識的な心」と「無意識的な心」に「身体」を加えた三元論となっていたが、とりわけ19世紀後半には「無意識的な心」を魂と見做す解釈が最も一般的なものとなる<sup>52</sup>。リードは、ここで魂が提示された背景を検討するためには、「無意識的な心」の基本的特徴として、夢を見ること、催眠による暗示感応効果、意図されざる行為等が挙げられていたことや、降霊会やトランス等の心霊的活動への注目が高まっていたことをふまえる必要があるとしたうえで、ロマン主義における「人間の魂は、ある意味で人間よりも大きく、日常生活では顕わにならない思考や能力を含んでい」という考えの影響を指摘している<sup>53</sup>。しかし、測定に代表されるような実証主義的手法が重視される19世紀末には、魂の研究は〈心〉を対象とする科学的心理学の領域の外に追放されることになる<sup>54</sup>。

概略的ではあるが、こうした歴史に鑑みれば、ゴルフにおける、ドクロリーは生物学的知見や測定といった方法を用いて当代における科学的な概念装置による解釈をしてはいるものの<sup>55</sup>、自己に関する言説を通してルソーのロマン主義的概念の域を抜け出していない<sup>56</sup>、という指摘は大変興味深いものである。指摘の意図は別として、ゴルフの指摘は的確であると考えられる。すなわちドクロリーにおいて、実証主義的であろうとすることと魂を追究することは矛盾せず、両者は並行している。認識活動が傾向ないし魂に規定されていると述べられるとき、ドクロリーにおける認識活動の検討は、実証主義的研究であると同時に魂の探究でもあることが示されていた。しかし特に後者については慎重に取り扱われるべきものと考えられたため<sup>57</sup>、多くは語られていない。

### 2.3. 基盤的なものの探究へ

では、魂の探究と矛盾せず、並行して着手可能であった傾向とは何か。そもそも傾向とは、当代フランス心理学において、精神的かつ生物学的な局面から検討が進められていた、欲求や本能、

欲動等を含む包括的概念のことである<sup>58</sup>。ドクロリー自身は、傾向について「複合的で変動する諸力であり、それは多くの多様な形態を呈し得るものである。それぞれの形態はその強度に応じて様々に変化する可能性がある」と述べている<sup>59</sup>。ドクロリーによる研究は主に観察、測定、実験といった手法で取り扱われるものであったが<sup>60</sup>、傾向研究において特徴的なことは「基盤 (fond)」が想定されていることである。ドクロリーは、環境への適応を余儀なくされる「今・ここ」を生きる人間の変わりやすく不安定な表層的なものに対し、心的個人を構成し、後の活動を保証するような基盤的なものがあるとしたうえで、無意識のプロセスの解明に着手している<sup>61</sup>。

基盤的なものについての関心は、認識活動の検討の一環として着手された「反応時間」への取り組みの中にも看取できる。反応時間とは、刺激が与えられてから手足や音声による反応が生じるまでの時間のことであるが<sup>62</sup>、当代において反応時間の実験的研究は、〈心〉を対象とする科学的心理学の基礎の一つをなすものであった<sup>63</sup>。しかしドクロリーの関心は反応時間の測定ではなく、その意味に寄せられた<sup>64</sup>。ドクロリーにとって重要なことは、第一に、反応時間という一語の中に感覚と行為の両方が同時に含まれているということであり、第二に、生理学的現象としての感覚や行為を可能にし、それらを包括する、基盤的なものがあるということであった<sup>65</sup>。すなわち、観察、測定、実験の対象となる表層における諸現象を可能にしている原理についての関心が確認される。

上述したようにドクロリーは傾向を諸力として説明しているが、これについては、ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の思想を導きとすることができる<sup>66</sup>。ベルクソンは『創造的進化』において、「生命は傾向であり、傾向の本質は、ただ増大するだけで、分岐する諸方向を創造しながら、束状に自身を展開すること」であると述べ<sup>67</sup>、次のように続ける。

創造された諸方向は、生命の弾みを分有している。われわれが性格と呼ぶ特別な傾向が進化するとき、われわれは自分自身に以上のよ

うなことが起こっているのを観察する。われわれは誰しも、自分の身の上を少しでも振り返ってみれば、子供の頃の人格が、不可分であるとはいえ、様々な人格を併せ持っていたことを認めるだろう。それらは生まれつつある状態であったので、互いに溶け合ったままでいられたのである。この期待に満ちた定まらなさは、幼少時代の最も大きな魅力の一つでさえある。しかし相互に浸透し合っている人格は増大するにつれて両立不可能になる。われわれは誰しも一つの人生しか生きることができないから、選択せざるをえないのである。われわれは実際たえず選び、そして同じく絶えず多くのものを捨てているのだ<sup>68</sup>。

ここでは生命ないし生命の弾みを傾向と言いつつ換えたいので、子どもの人格における「定まらなさ」が「選択」を経て「一つの人生」を創造していく様子が描かれている。留意すべきは、こうした生命による創造としての適応は機械的な反復ではなく、つねに偶然性を帯びた応答として捉えられていることである<sup>69</sup>。また、ベルクソンが生命ないしその弾みを傾向と換言したことについて、金森は次のように指摘する。

それ [生命にある根本的な弾み——筆者注] は生命に時間の経過とともにますます複雑な形態を与え、生命をある高貴な使命に導いていく。〈はずみ〉と呼ばれると、そのはずみを支える物質的基体つまりならかの弾性体を表象しがちだが、ベルクソンの場合、その物質的基体に対する存在措定はあえて解放されたままの曖昧性を保っている。純粋な物質ではない可能性を示唆するためか、ときにそれはひとつの〈傾向〉(tendance)とも呼ばれる<sup>70</sup>。

ベルクソンが生命の弾みを傾向と換言するのは、生命の弾みを支えるものが「純粋な物質ではない可能性を示唆するため」の戦略として捉えられている。ベルクソンにおいて、生命の弾みないし傾向の「原初の起動者」つまり基盤的なものは

曖昧にされている<sup>71</sup>。ベルクソンにおいて「不断の創造」として示される「生命は直前の状態の解析学的規定からは逃れ、予想のつかない展開を示す」のであり、「生命は個別的生物そのものではなく、それを貫くある種の運動である」<sup>72</sup>。金森による解釈をふまえるならば、ドクロリーにおける基盤的なものへの関心は、ベルクソンが戦略的に曖昧にすることで提示しようとした生命についての関心であり、挑戦であったと考えられる<sup>73</sup>。

振り返れば、ドクロリーにおける「自己」は、人間が知性の可能性にひらかれることの象徴であると同時に、人間が生物学的意味を超え出ることができないという有限性の象徴でもあった。そして、ドクロリーは「活動する子ども」に、生物的で心的な生のダイナミクスを見ていたが、それは欲する存在としての「自己」の具体的で表層的な姿であった。そうした表層的で不安定で変わりやすい、つまりは欲し続ける「自己」の傾向についての研究は、魂ひいては生命の探究の系譜に位置付けられ得るものである。「自己」は——傾向、魂、生命のいずれに引きつけて理解を試みるにしても——「今・ここ」の表層と「今・ここ」には現れ出ないが表層を規定する基盤的なものが繋がり交錯するダイナミクスの場として理解されている。基盤的なものと表層の関係、さらには、「自己」が目指し駆動するところの倫理について詳らかにしていくことで<sup>74</sup>、ドクロリーにおける「自己」はより鮮明に捉えられると考える。

## おわりに

おそらく私たちは、当代におけるドクロリーの仕事を今日的な教育学や心理学といった枠組みを超えたより大きな視座から捉える必要があるのかもしれない。いわゆる〈心〉の歴史の系譜に位置付けられる教育学や心理学の枠組みに注目しているのはドクロリーの思想は十分に見えてこない。私たちは改めて、ドクロリー・メソッドにおける「自己」は欲する存在であり、無意識の欲求を知性によって意識化し、発現する諸傾向を変容させる可能性をもつものであるが、これは同時に、常に意識化されない無意識の部分を持ち続けているもの

であることにも目を向ける必要がある<sup>75</sup>。

ただ、ベルクソンにおいて戦略的に曖昧にされているとも言える生命に、ドクロリーがどのように挑戦しているのかについては、さらなる検討を重ねていかなければならないだろう。基盤的なものの探究に向かうドクロリーにおいて、ベルクソンにおける生命ないしその弾みが含まれる思想的興行きはどこまで、あるいは、どのように共有されていたのか。本稿で提示したドクロリーにおける「自己」のダイナミクスと「正常」「異常」の枠組み、ひいては社会防衛的思想等との関係については、慎重に見ていく必要があるだろう。これらの検討は今後の課題としたい。

### 【註】

\*引用部の邦訳については、適宜変更している部分がある。

- 1 ウィリアム・ボイド／ワイアット・ローソン 著、国際新教育協会訳『世界新教育史』玉川大学出版部、1966年、pp.48-55。
- 2 斎藤佐和「解説」ドクロリー著、斎藤佐和訳『ドクロリー・メソッド』明治図書出版、1977年、p.254。同「ドクロリー——子どもの生活に根ざす教育を求めて」松島鈞・白石晃一編『現代に生きる教育思想』(第7巻)ぎょうせい、1982年、p.373。
- 3 Valdi José Bassan, *Comment intéresser l'enfant à l'école—La notion des centres d'intérêt chez Decroly*, P.U.F., 1976. Jean-Marie Besse, *Ovide Decroly—psychologue et éducateur*, Editions Privat, 1982.
- 4 その要因として、斎藤は、ドクロリーが自らの思想を体系的に示すに至っておらず、同メソッドはフランスの心理学者アンリ・ワロン (Henri Wallon, 1879-1962) による解説を経て理解されてきたことを指摘している (前掲斎藤論文、1977年、pp.253-254)。
- 5 Angelo Van Gorp, “From Special to New Education—The Biological, Psychological, and Sociological Foundations of Ovide Decroly’s Educational Work (1871-1932),” *History of*

*Education*, Vol.34, No.2, 2005, pp.135-149.

- 6 Sylvain Wagnon, *Ovide Decroly, un pédagogue de l'éducation nouvelle—1871-1932*, P.I.E. Peter Lang, 2013.
- 7 田中智志「大正新教育の思想史へ——躍動する生命の思想」『近代教育フォーラム』22号、2013年、pp.94-99。同「ドクロリーの教育思想の基礎——全体化と生命」橋本美保・田中智志編著『大正新教育の思想——生命の躍動』東信堂、2015年、pp.62-88。いずれにおいても田中はドクロリーやベルクソンをはじめとする同時代の思想の中にはキリスト教存在論の視座を共有するものがあるという大まかな見方を提示している。
- 8 Ovide Decroly, «Une expérience de programme primaire avec activité personnelle de l'enfant,» Sylvain Wagnon (dir.), *Ovide Decroly.—Le programme d'une école dans la vie.*, Editions Fabert, [1921] 2009, pp.157-158。尚ここでは「bio」を「生物的」、「biologique」を「生物学的」と訳出したが、前者は「生命の」、後者は「生命に関する」とも訳出できる。
- 9 Ibid., p.158.
- 10 Ibid.
- 11 Ibid.
- 12 Ovide Decroly et Gérard Boon, «Vers l'école rénovée. Une première étape,» Sylvain Wagnon (dir.), op.cit., [1921] 2009, p.141。(ドクロリー著、斎藤佐和訳「学校の改革をめざして」前掲書、1977年、pp.21-22。)
- 13 ここでの欲する存在としての「自己」をエロース的ということができるかどうかは重要である。リードは「人類に遍く平等に与えられている神の静謐な愛、神の恩寵」に結びつくアガペーに対し、「魂をかきたて、自らの外部へと進出し、外部の存在によって自己の魂を完全なものにするよう促す愛」であるエロースを提示している (エドワード・S・リード著、村田純一・染谷昌義・鈴木貴之訳『魂から心へ——心理学の誕生』講談社、2020年、pp.103-104)。エロースは「自己を動機付け、自分の中には欠けている徳をもった対象を探し求めるよう促し、「自

- 己の魂には欠けている徳を持った対象と調和し、結合することができる」が（同上書、p.104）、それは生殖や肉体・肉欲のみならず、認識や精神への欲望をかき立てるものである（同上書、p.106）。
- 14 Ovide Decroly, «Le programme d'une école dans la vie,» Sylvain Wagnon (dir.), op.cit., [1908] 2009, p. 101. Decroly et Boon, op.cit., p.140.
- 15 Decroly, op.cit., [1921] 2009, p.158.
- 16 Ovide Decroly et Guillaume Vermeylen, *Séméiologie psychologique de l'affectivité et particulièrement de l'affectivité enfantine* (Extrait du volume jubilaire publié à l'occasion de l'anniversaire de la fondation de la Société de Médecine Mentale de Belgique), Imprimerie Médical et Scientifique, 1920, p.45.
- 17 Ibid., p.28.
- 18 Ibid.
- 19 Ibid., p.36.
- 20 Ibid., pp.36-37.
- 21 Ibid. amour-propreは一般に「自尊心」「利己心」と訳出される。本稿ではself-feelingを受け「自己感覚」としたが、詳細な検討が必要である。
- 22 Ibid., p.38.
- 23 Ibid., pp.38-44.
- 24 Ibid., pp.30-34, 45.
- 25 ドクロリーにおいて生物学と倫理学は同程度の重みをもつものとして提示されているように見受けられる。たとえば「共感」についてドクロリーは、無意識の原初的な共感、動物が群れをなす本能（群居性にみられる誘引性）によるものとしているが、これは同胞と喜びや痛みを分有する段階にまで至ることもあると述べている（Ibid., pp.39-40）。
- 26 Decroly, op. cit., [1908] 2009, p.100.
- 27 ニコラス・ローズ著、堀内進之介・神代健彦訳『魂を統治する——私的な自己の形成』以文社、2016年、p.222。
- 28 同上書、pp.228-229。
- 29 同上書、pp.231-237。
- 30 同上書、p.229。ローズは、19～20世紀の英語圏ないしヨーロッパを検討対象として、「自己の制度」における「自律的かつ自己実現的で自己同一的な主体の主権への祝福」を描出しているが、他方で、それを「拒絶」したり「懐疑」したりする考え方を検討することの倫理的重要性も指摘している（同上書、pp.29-30）。とはいえ、上述した「自己の制度」の背景に「近代的な自己」が「自由」を模索する中で、とりわけ「心」を問題化する専門知の利用を通して「自己」の自律性を強化してきたという大きな文脈があること、および、そうした文脈を成立させ、その維持を前提とする道徳や倫理があることには留意すべきである（同上書、pp.349, 420-421）。
- 31 Van Gorp, op.cit., pp.135-150.
- 32 当代ベルギーにおける進化論の影響は以下を参照。Marc Depaeppe, Raf De Bont and Kristof Dams, “How Darwinism has affected Catholic as well as non-Catholic psycho-pedagogical constructs in Belgium from the 1870s to the 1930s,” *Paedagogica Historica*, Vol.48, No. 1, 2012, pp. 51-66. ゴルプはドクロリーについてはスペンサーの影響を指摘している（Van Gorp, op.cit., p.144）。また、ゴルプはドクロリーが優生思想の研究に参加していることを明かしたが、「ドクロリーは第一に社会衛生学者であり、意固地な優生学者ではない」として、遺伝的要素に固執していたのではないことを指摘している（Ibid., pp.140-141）。
- 33 Ibid., p.138.
- 34 Ibid.
- 35 Ibid.
- 36 栗原福也『ベネルクス現代史』山川出版社、1982年、pp.82-91, 114-130。ジョルジュ＝アンリ・デュモン著、村上直久訳『ベルギー史』白水社、1997年、pp.87-94。
- 37 Sylvain Wagnon, «Le «dispositif Decroly», un levier éducatif pour réformer la société (Belgique 1900-1930),» *Les Etudes Sociales*, n°. 163, 2016, pp.127, 132.
- 38 Ibid., pp.117-132.
- 39 Ibid., p.126.
- 40 Ibid., p.129.

- 41 Ibid., p.132.
- 42 Ibid. ゴルプによれば、ドクロリーは「行動によって人間存在はよりよい未来を保証しようとすることを確信していた」(Van Gorp, op.cit., p.139)。また当代ベルギーでは教育の世俗化をめぐって盛んに議論が行なわれ、ベルギー政界において学校問題は重要な関心事となっていた(河原温「ベルギー王国とルクセンブルク大公国の成立」森田安一編『スイス・ベネルクス史』山川出版社、1998年、pp.380-401)。
- 43 Wagnon, op.cit., 2016, p.132.
- 44 Ibid.
- 45 Decroly, op. cit., [1929] 2009, p.186. (前掲ドクロリー論文、p.88。)
- 46 前掲斎藤論文、1977年、p.256。
- 47 前掲リード書、p.42。
- 48 同上書、p.26。
- 49 同上書、p.32。
- 50 同上書、p.37。
- 51 同上書、p.42。
- 52 同上書、p.194。
- 53 同上書、pp.194-195。
- 54 同上書、pp.227-228。
- 55 Van Gorp, op.cit., p.146.
- 56 Ibid., p.148. ゴルプは、ドクロリーによって生物学的視点から安定的で抽象的な子ども像が抽出されていることを指摘した。また、ゴルプはルソーをThe New School Movementの草分けと位置付けている。
- 57 Depaepae et al, op.cit., p.57. 当代ベルギーのカトリックにおける一般的な進化論受容では魂については別問題とされた。こうした特徴は、フラーンデレン地方では、カトリックの心理学に限らず、厳格で教条的な教育の領域にも見られた。
- 58 松本雅彦「力動学派 3 心理分析と有機力動論」土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏編『学派と方法』(異常心理学講座1) みすず書房、1988年、p.230。
- 59 Decroly et Vermeylen, op.cit., p.19.
- 60 Ibid. Ovide Decroly, *Etudes de psychogénèse. Observations, expériences et enquêtes sur le développement des aptitudes de l'enfant*, Maurice Lamertin, 1932.
- 61 Decroly et Vermeylen, op.cit., p.6.
- 62 大山正「反応時間研究」梅本堯夫・大山正編著『心理学史への招待——現代心理学の背景』サイエンス社、1994年、pp.81-88を参照。
- 63 前掲リード書、pp. 199-200。
- 64 詳細は、渡邊優子「ドクロリー・メソッドにおける「連合」の概念——フランス心理学における解離研究との繋がりから」『教育学研究』87巻1号、2020年、pp.25-37。また、リードによれば、同時代のジェームズ(William James, 1842-1910)などにおける反応時間の検討でも、その測定ではなく「内観や直接的な分析によっては観察できないと考えられる意味の領域」ないし「心に関する存在論的な関心」が追究されている(前掲リード書、p.259)。
- 65 ドクロリーにおける反応時間の検討で「潜在的な時間」と言い表されたものを本稿では基盤的なものとして捉えている(前掲渡邊論文を参照)。
- 66 ドクロリーは自身が〈全体化〉と名付けた認識活動とゲシュタルトの理論やベルクソンの「直観」、デューイ(John Dewey, 1859-1952)の*How we think*にみられる考え等との関連性を示唆するも詳細を明かしていない(Decroly, op.cit., [1929] 2009, p.185)。金森は、ベルクソンの進化論の特徴として進化が「心理的特性」すなわち「意識の流動性」との連関から捉えられていることを指摘している(金森修「ベルクソンと進化論」『現代思想』(臨時増刊号) 22巻11号、1994年、pp.390-391)。
- 67 Henri Bergson, *L'Evolution créatrice*, Félix Alcan, [1907] 1908, p.108. (アンリ・ベルクソン著、合田正人・松井久訳『創造的進化』筑摩書房、2010年、p. 134。)
- 68 Ibid., pp.108-109. (同上。)
- 69 Ibid., pp.63, 105. (同上書、pp. 86, 130-131。)
- 70 前掲金森論文、p.389。
- 71 同上論文、p.390。
- 72 同上。
- 73 新教育は、適応、順応、環境、機能という

ような進化論的諸概念によって規定されたが、「いずれにしても、人間の発達には生体の保存を確保するための何らかの原理があること、それが上昇の進化あるいは生成を示す過程であることを含意」していた（原聡介「発達について」長尾十三二編『新教育運動の理論』明治図書出版、1988年、pp.148-149）。原は、具体的に、優生学的発達、種の歴史を反復する発達、生成としての発達の三つが挙げ、生成としての発達に、ベルクソンの思想を位置付けている（同上論文、pp.149-153）。

74 ドクロリーの「連帯」としての倫理とベルクソンにおける倫理の比較検討が課題であると考ええる。

75 リードによれば、〈心〉の心理学においては上述したエロース的経験を〈心〉から追放し、身体に位置付けるために、無意識のもつ機能を限定し、身体の変化との相関によって捉えようとするが、他方、魂の心理学において無意識は自己の不可欠な部分と見做される（前掲リード書、pp.195-196）。

76 原は「自然のうちに込められたものが外化する過程としての発達は、かくあるという存在概念であると同時に、そのようにしかあり得ないという必然性のロジックを経て、かくあるべしという規範概念に転化しうる」としたうえで、新教育期において子どもの発達は「かくあるべきだ、あるいはかくありたい、という目標のないし規範的思考の照り返しの中で組立てられていた」ことを指摘している（前掲原論文、p.147）。

---

[抄録]

本稿ではオヴィド・ドクロリーにおける「自己」について思想史的観点から検討する。ドクロリーにおいて「自己」は「活動する子ども」の検討を通して、生物的で心的な生が繋がり交錯するところのダイナミクス場として描出されている。この「自己」は、一方では、社会防衛的思想との関連から捉えられるが、他方では、表層の現象を規定する基盤的なもの、すなわち傾向や魂、ひいてはベルクソンにおける生命の思想との繋がりからも捉えられる。

---

